

船橋市古作中台遺跡

— 東京税関古作寮建設に伴う埋蔵文化財調査報告書 —

平成 7 年 3 月

大 蔵 省 関 東 財 務 局
財団法人 千葉県文化財センター

こ さく なか だい
船橋市古作中台遺跡

— 東京税関古作寮建設に伴う埋蔵文化財調査報告書 —

平成 7 年 3 月

大 蔵 省 関 東 財 務 局
財団法人 千葉県文化財センター

序 文

船橋市は東京湾沿岸に位置しています。この付近は、東京から至近距離でもあることから、早くから開発が進み、これに伴う埋蔵文化財の発掘調査も数多く行われています。その結果、多くの貴重な資料が得られ、千葉県歴史を考える上で、重要な地域のひとつとなっています。

またこの地区には、旧船橋海軍無線電信所の送信用鉄塔が立っていたことでも知られています。この送信用鉄塔は、大正5年に建てられ、昭和46年に撤去されています。

今回、この鉄塔跡地の一部に、東京税関の古作寮が建設されることとなりました。このため、千葉県教育委員会では、建設予定地内に所在する埋蔵文化財の取扱いについて、関係諸機関と協議した結果、発掘調査を実施することで協議が整いました。

発掘調査は、財団法人千葉県文化財センターが平成5年7月から同年9月まで実施し、旧石器時代の石器集中地点2か所を確認するなどの成果が得られました。このたび、整理作業が終了し、その成果を報告書として刊行することとなりましたが、本書が、地域の歴史を知る資料として活用されることを願ってやみません。

終わりに当たり、発掘調査から報告書の刊行まで、さまざまな御指導、御協力をいただいた千葉県教育委員会、大蔵省関東財務局千葉財務事務所、船橋市教育委員会、その他多くの関係各位に、厚くお礼を申し上げます。また発掘調査、整理作業に従事された多くの調査補助員の皆さまにも心から感謝の意を表します。

平成7年3月

財団法人 千葉県文化財センター
理事長 奥山 浩

凡 例

1. 本書は、千葉県船橋市古作1-415-2ほかに所在する古作中台遺跡^{こまくなかだい}（遺跡コード204-008）の発掘調査報告書である。
2. 調査は、東京税関古作寮建設に伴う埋蔵文化財調査として、千葉県教育委員会の指導のもとに、大蔵省関東財務局千葉財務事務所との委託契約に基づいて、財団法人千葉県文化財センターが実施した。
3. 発掘調査は、平成5年7月1日から同年9月30日まで行い、整理作業及び報告書作成は平成6年5月2日から同年5月31日に実施した。
4. 発掘調査については、調査研究部長高木博彦、印西調査事務所長田坂 浩の指導のもとに、技師豊田秀治が担当した。
5. 整理作業及び本書の執筆・編集は、調査研究部長西山太郎、印西調査事務所長谷 旬の指導のもとに、主任技師田形孝一が担当した。
なお、旧石器時代の石器の分類・石材鑑定については、主任技師落合章雄の協力を得た。
6. 本書で使用した地形図の出典は以下のとおりである。
第1図 国土地理院発行 1/25,000地形図『船橋』（N-54-25-2-2）
第2図 船橋市役所発行 1/2,500都市計画図『船橋21』

本文目次

序文

凡例

目次

I	はじめに	頁
1.	調査に至る経緯	2
2.	遺跡の位置と環境	2
II	概要	
1.	調査区の設定	5
2.	調査の経過	5
3.	基本土層	5
III	確認調査	
1.	上層トレンチ	7
2.	下層グリッド	7
IV	遺構	
1.	概要	8
2.	第1ブロック	9
3.	第2ブロック	10
4.	炭化物集中地点	10
V	遺物	
1.	概要	11
2.	石器	11
3.	その他の遺物	14
VI	まとめ	15

挿図目次

第1図	古作中台遺跡の位置と周辺の遺跡	3
第2図	遺跡周辺地形	4
第3図	基本土層	5
第4図	調査区全体	6
第5図	上層確認トレンチ配置	7
第6図	第1ブロック遺物分布	8
第7図	第2ブロック遺物分布	9
第8図	第1ブロック出土遺物	11
第9図	第2ブロック出土遺物	12
第10図	その他の出土遺物	14
附 図	古作中台遺跡地形測量	

表目次

第1表	第1ブロック出土遺物計測表	13
第2表	第2ブロック出土遺物計測表	13
第3表	銭貨計測表	14

図版目次

図版表紙	旧船橋海軍送信所の記念碑	
図版 1	遺跡周辺の航空写真	
図版 2	遺跡空中写真	
図版 3	基本土層(B2-89グリッド)・第1ブロック・第2ブロック	
図版 4	第1ブロック出土石器・第2ブロック出土石器・その他の出土遺物	

I はじめに

1. 調査に至る経緯

平成5年、大蔵省関東財務局千葉財務事務所は、船橋市古作の東京税関古作寮建設に伴い、当該地区の埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて千葉県教育委員会に照会した。千葉県教育委員会は現地踏査を実施し、遺跡が所在する旨を回答した。その後、埋蔵文化財の取扱いについて千葉財務事務所と協議した結果、建設に先立ち発掘調査を行うことで協議が整った。発掘調査は、平成5年7月から、財団法人千葉県文化財センターが実施することとなった。

調査前の踏査では、この地区に旧船橋海軍無線電信所の送信用鉄塔が立っていたことから、その当時の鉄塔の基礎などが、かなり深くまで及んでいることが予想された。周辺は、住宅地が近接し、通行の多い道路に面していることなどから、安全性を考え、鋼板フェンス・防塵ネット・シートゲートなどの環境整備を整えることが必要となった。

現地での発掘作業は、平成5年7月1日から開始した。確認調査・本調査を経て、平成5年9月30日に、現地でのすべての作業を終了した。

2. 遺跡の位置と環境

行田・古作地区は、船橋市の西端に当たり、市川市と隣接する。行田地区には、大正5年に旧船橋海軍無線電信所が建てられた。第二次世界大戦後も、電信所の鉄塔はしばらく存在し、昭和46年に取壊しが行われている。その後、この地区も宅地化が進み、現在は、行田団地をはじめとする住宅地となっている。またこの地区には、昭和3年に建設された中山競馬場があり、場内には縄文時代後期の貝輸入り蓋付き土器の発見などで著名な古作貝塚が存在する。古作貝塚は、昭和56年から58年にかけて、厩舎建替えなどにより、発掘調査が行われている。古作中台遺跡は、古作貝塚が所在した中山競馬場と、行田団地が所在する行田町の中間に位置する。下総台地特有の、複雑に開析される支谷に面した台地上の突端である。現在は、JR武蔵野線が古作地区と行田地区の中間を縦断するが、本遺跡の今回の調査地点はその路線沿線である。なお、水系は葛飾川水系となる。

周辺の遺跡として、前述した古作貝塚のほかに、印内台遺跡群、東中山台遺跡群、上山台遺跡群、藤原台遺跡群など、大規模な遺跡群が存在する。また、行田地区から上長津川を挟んだ西側の台地上に、夏見台遺跡群が存在する。



- | | | |
|------------|-----------|------------|
| 1 古作中台遺跡 | 6 前貝塚掘込貝塚 | 11 海神古墳 |
| 2 古作貝塚 | 7 夏見台遺跡群 | 12 山野古墳 |
| 3 市川市貝柄塚遺跡 | 8 飛の台貝塚 | 13 印内台遺跡群 |
| 4 藤原台遺跡群 | 9 宝塚遺跡 | 14 東中山台遺跡群 |
| 5 上山台遺跡群 | 10 行田貝塚 | |

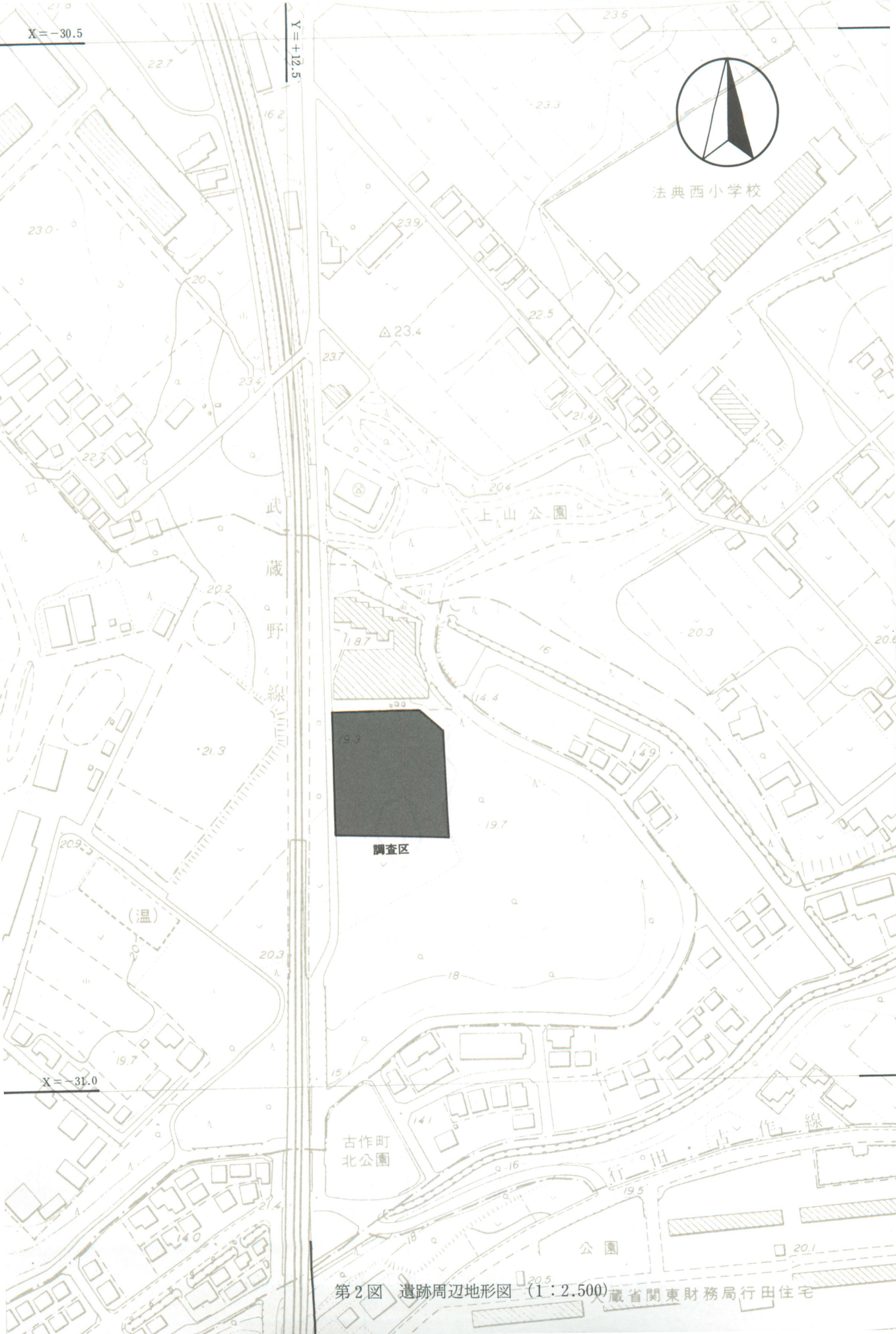
第1図 古作中台遺跡の位置と周辺の遺跡 (1:25,000)

X = -30.5

Y = +12.5



法典西小学校



武蔵野線

上山公園



調査区

(温)

古作町北公園

公園

蔵省関東財務局行田住宅

第2図 遺跡周辺地形図 (1:2,500)

X = -31.0

II 概要

1. 調査区の設定

今回の調査は、台地上に展開する古作中台遺跡のうち、東京税関古作寮建設予定地に当たる3,564m²の調査である。遺跡全体からすると、台地の平坦面端部に相当する一部分である。

調査地点の状況は、旧船橋海軍送信所の鉄塔跡地であることから、特に上層遺構について、遺存状態の悪いことが想定された。このため、調査は上層・下層ともに確認調査を実施し、遺構の有無、遺物の包含状況などの把握を行った。また、調査区内に均一的な確認トレンチ・グリッドは配置できず、調査区内の状況に応じてトレンチ・グリッドの配置を行った(第5・6図)。グリッドは基本となる大グリッドとして20m×20mを設定した。西からA～C、北側から1～4の組合せによる大グリッド名をつけた。さらに、大グリッドを2×2mの小グリッドに分割した。北西隅を基準とし、東へ00～09、南へ00～90、南東隅を99とした。

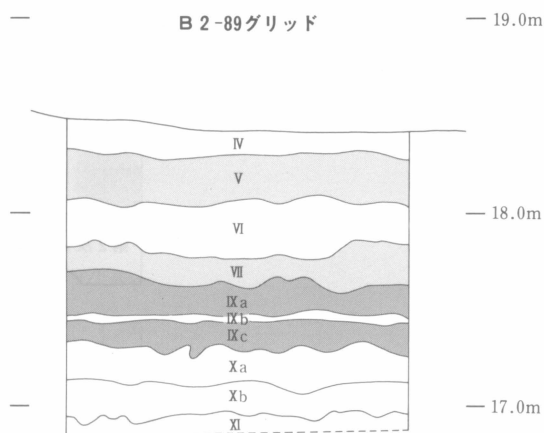
2. 調査の経過

本事業は、平成5年7月1日から開始した。まず安全対策、周辺地域への環境対策として、鋼板フェンス・防塵ネット・シートゲートの設営を含めた準備を行い、実際の現地での調査は7月12日から開始した。上層の確認のため、確認トレンチを設定し、バックホウを使用して表土除去を行う。上層遺構の確認後、7月22日から、並行して下層グリッドの設定を行い、下層の確認調査を開始した。その結果、下層については、遺物出土地点・炭化物集中地点の確認状況から、遺物集中地点(ブロック)や生活痕跡などの存在が想定され、本調査の必要が生じた。このため、8月20日から、本調査を実施した。本調査終了後、9月29日埋戻し作業、9月30日に詰所・機材などの撤収を行い、現地でのすべての作業を終了した。

整理作業は、平成6年5月1日から5月31日まで実施した。

3. 基本土層

今回の調査地点での基本土層は以下のとおりである。なお、今回の調査地点では、立川ローム最上部に相当するⅢ層までがほとんどの確認グリッドで遺存しなかった。Ⅳ～Ⅵ層は、黄色味の強い部分であるⅣ層、第1黒色帯に相当するⅤ層、始良Tn火山灰をブロック状に含むⅥ層とに区分した。このうち、Ⅳ層・Ⅴ層につ



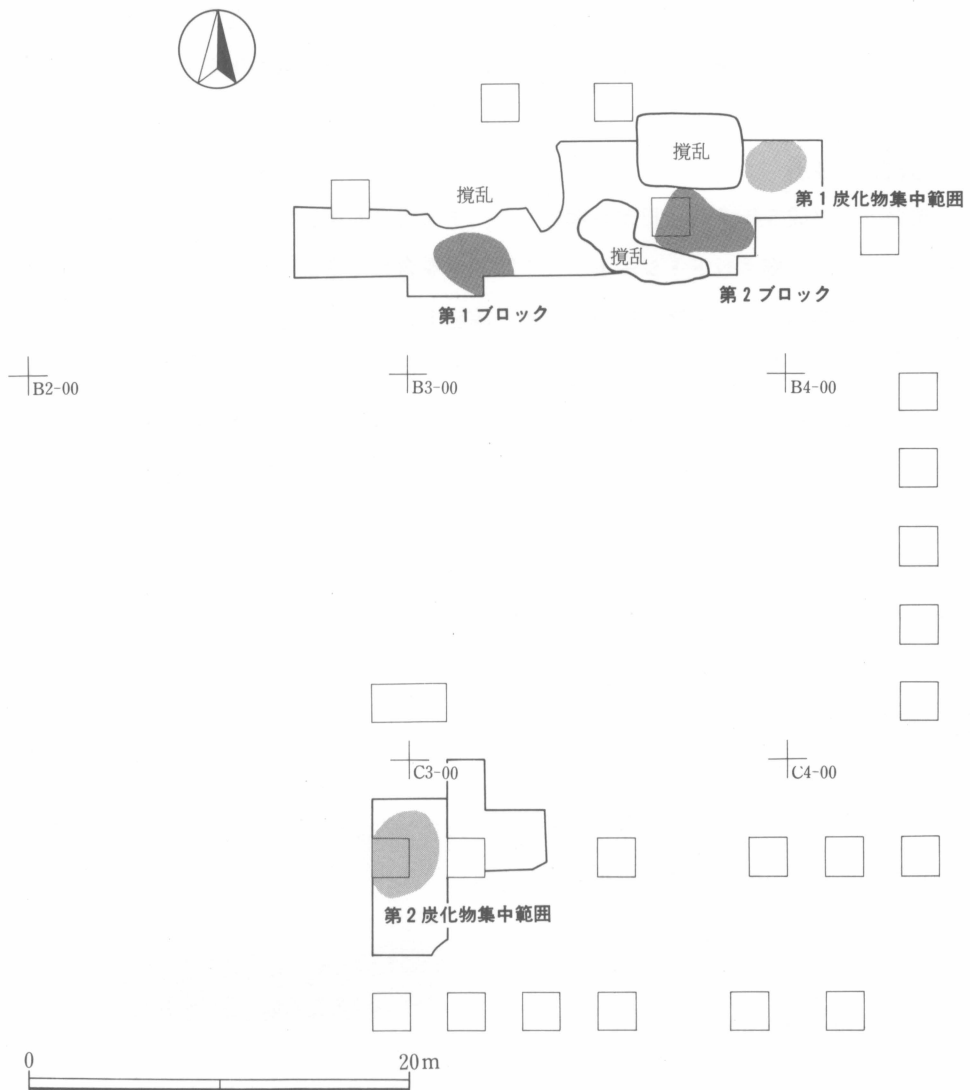
第3図 基本土層 (1/40)

いては、その色調差は微妙である。VII～X層については、本遺跡の所在する東葛飾地区は、県内の他地域と比較して、土層区分が明瞭に行える地域である。本遺跡においても同様で、第2黒色帯として、VII～IXa・IXb・IXc層が明瞭に区分できた。VII層の上部には始良Tn火山灰の拡散が認められる。X層は、立川ローム最下層である。色調により、Xa・Xb層に区分した。それより下層のXI層以下が武蔵野ロームとなる。

参考文献

島立 桂・新田浩三・渡辺修一 「下総台地における立川ローム層の層序区分」『研究連絡誌』第35号 千葉県文化財センター 1992年

四柳 隆 『船橋市夏見台遺跡』 千葉県文化財センター調査報告第204集 1992年



第4図 調査区全体 (1:400)

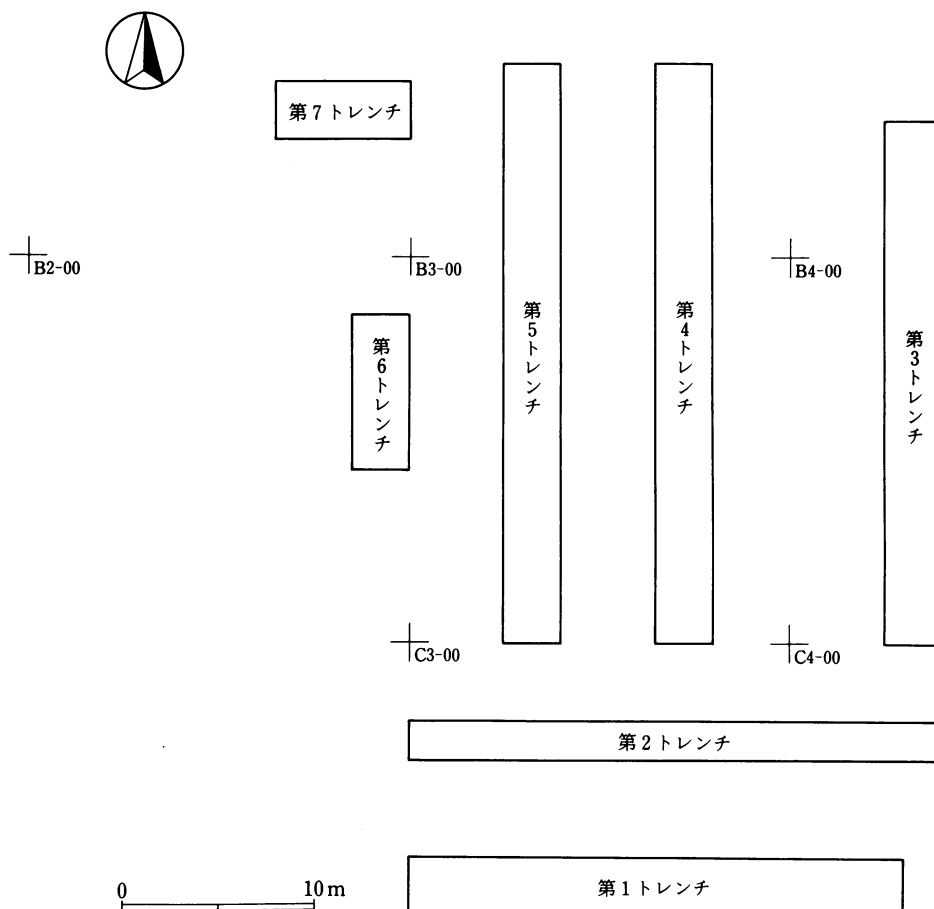
III 確認調査

1. 上層トレンチ (第5図)

上層については、第5図に示したトレンチを設定した。バックホウによる表土除去後、トレンチ内の精査を行った。土師器の小破片、近世の銭貨・キセル・泥面子・基石、近世ないし近代の陶磁器の小破片などが、各トレンチ内から少しずつ見つかった。しかし、調査前に想定したとおり、鉄塔の基礎であるコンクリートなどの攪乱も著しく、遺構は全く遺存しなかった。このため、遺物の取上げを行い、上層については確認調査のみで終了とした。

2. 下層グリッド (第4図)

下層は、上層の確認調査と並行して、主として上層トレンチ内の攪乱のない場所を選定して、2m×2mのグリッドを設定した。この結果、遺物出土地点を3か所、炭化物集中地点を2か所で確認した。



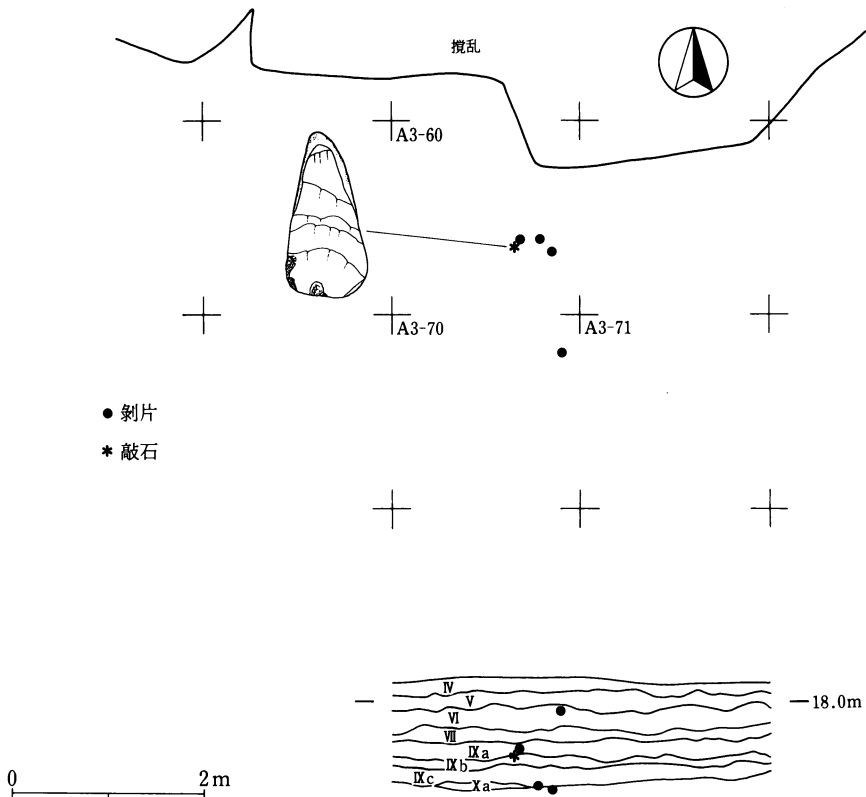
第5図 上層確認トレンチ配置 (1:400)

IV 遺 構

1. 概 要

確認調査で見つかったのは、旧石器時代の遺物出土地点3か所、炭化物集中地点2か所であった。本調査では、これらのグリッドを中心として、遺物分布の広がりや出土層位の広がりについて調査した。本調査として拡張したグリッドは、第4図に示す。

前述したとおり、本遺跡の今回の調査地点は、鉄塔の基礎による大規模な攪乱が至る所であり、その深さは、今回の本調査の対象である旧石器時代の遺物包含層にも達していた。このため、本調査の結果見つかった遺物集中地点（ブロック）は、攪乱と攪乱の間にわずかに遺存したもので、2か所のブロックとも同様であった。したがって、今回見つかった遺物のみでブロック全体の様相はうかがえない。また、黒曜石製の尖頭器が見つかった第3トレンチ内の出土地点を中心とした拡張区からは、それ以外に遺物の出土はなく、1点のみの単独出土であった。



第6図 第1ブロック遺物分布 (1/80)

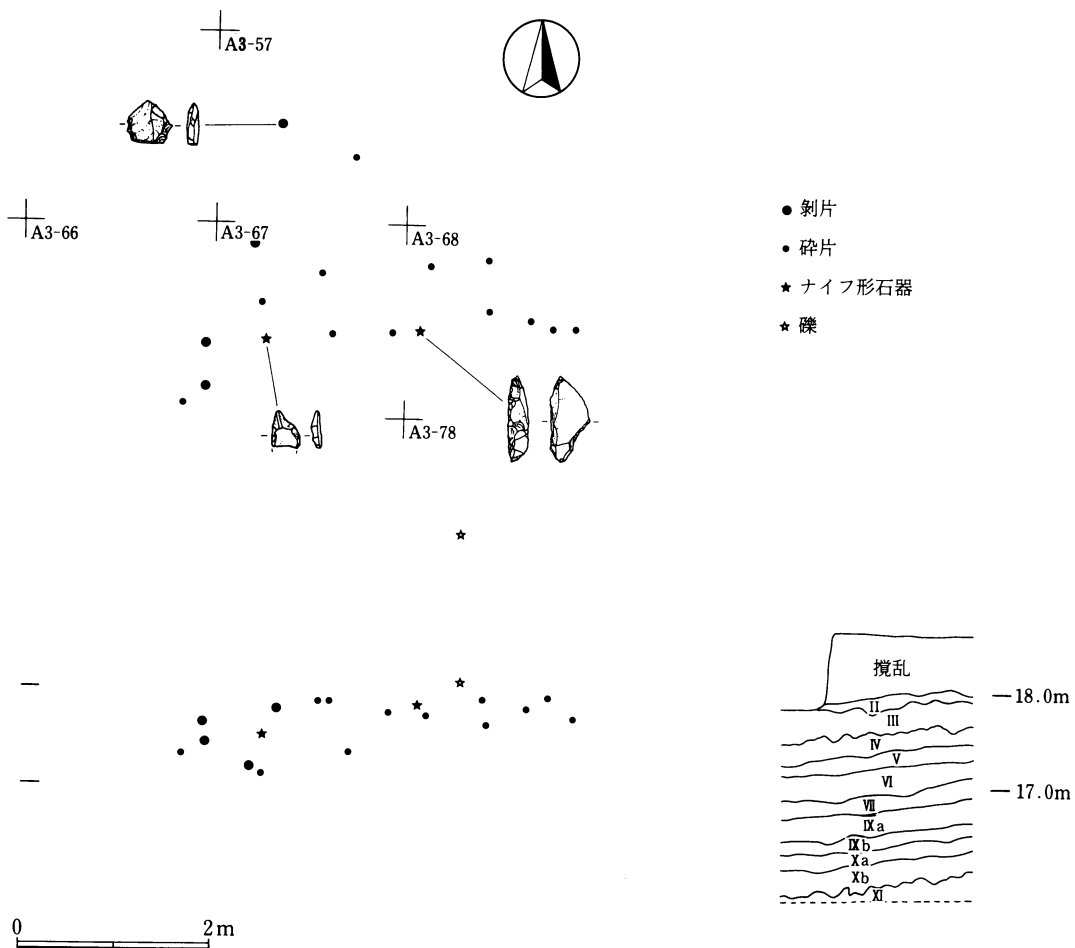
2. 第1ブロック (第6図、図版3)

出土状況

A3-60グリッド、A3-70グリッドに分布する。A3-60グリッドの南東、A3-70グリッドの北東にかけて1m程度の狭い範囲に集中する。しかし、北側には大きな攪乱があるため、全体を知ることはできない。ただし、南側については、A3-70グリッドの南側での出土がないため、分布の南限と考えた。遺物出土レベルの高低差は、約0.8mほどである。土層断面への投影で示すとおり、VI層からIXc層まで及ぶ。

母岩別資料の分布

遺存する遺物の使用石材は珪質頁岩と変成岩で、母岩はいずれも2種類ずつ存在する。なお、敲石としたA3-60グリッドの2とA3-60グリッドの3・4は、いずれも変成岩であるが、石材の鑑定から、明らかに別母岩である。



第7図 第2ブロック遺物分布 (1/80)

3. 第2ブロック (第7図、図版3)

出土状況

A 3-57グリッド、A 3-66グリッド、A 3-67グリッド、A 3-68グリッド、A 3-78グリッドに分布する。A 3-57グリッドの北側、A 3-78グリッドの南西側には大きな攪乱があり、ふたつの大きな攪乱に挟まれて遺存する。このため、本ブロックも全体をうかがい知ることとはできない。ただし、A 3-66グリッドでは出土した3点が東側に集中し、A 3-67グリッドで6点、A 3-68グリッドで7点と、この3か所のグリッドで計16点のまとまった出土を見ることができる。残念ながら南側の攪乱により、南北方向の広がりは不明であるが、東西方向からある程度の広がりは想定できよう。遺存する分布範囲は、東西4.3m、南北4.7mである。遺物出土レベルの高低差は0.8mほどである。南北に大きな攪乱が存在するため、良好な断面図を作成することができなかったが、周辺のグリッドでの断面を掲げた。図に示したとおり、III層最上部からVI層中にかけての出土である。

母岩別資料の分布

遺存する遺物のうち、使用石材は珪質頁岩、安山岩、砂岩の3種類である。特に珪質頁岩が目立つ。見つかった遺物のうち、ナイフ形石器2点は、一つが安山岩、もう一つが珪質頁岩である。安山岩は、ナイフ形石器以外には剝片・碎片とも一切見つかっていない。また、もうひとつのナイフ形石器の母岩である珪質頁岩3も、これ以外には剝片・碎片とも見つかっていない。ほかの母岩には、むしろ碎片が多いことを考えれば、サンプリングエラーはほとんどないと考えられ、本ブロックの特徴と言える。

4 炭化物集中地点

第1炭化物集中地点

A 3-49グリッドを中心としたグリッドに集中する。南西側に隣接して、第2ブロックが存在する。分布範囲は、東西4.5m、南北3.0mほどである。確認した層位は、IV層下部からV層上面にかけて、すなわち立川ローム第1黒色帯上面に相当する。炭化物の広がり、A 3-49グリッドからA 4-40グリッド西側半分ほどに最も集中する。なお、本集中地点は、調査期間の関係で最上面での集中範囲しか記録できなかった。このため、最終的な炭化物分布の厚みについては不明であるが、おそらく第1黒色帯中にかけての分布となろう。また、集中は炭化物のみで焼土粒はない。

第2炭化物集中地点

C 2-29グリッドを中心としたグリッドに集中する。付近に遺物集中地点は確認しなかった。分布範囲は、東西3.5m、南北4.5mほどである。確認した層位は、IV層下部からV層にかけて、厚さ約0.3mほどの集中を認めた。本遺跡のV層の標準的な層厚が0.3mであることから、ほぼ第1黒色帯の層内に、炭化物の集中があることになる。第1集中地点同様、炭化物のみで焼土粒はなかった。

V 遺物

1. 概要

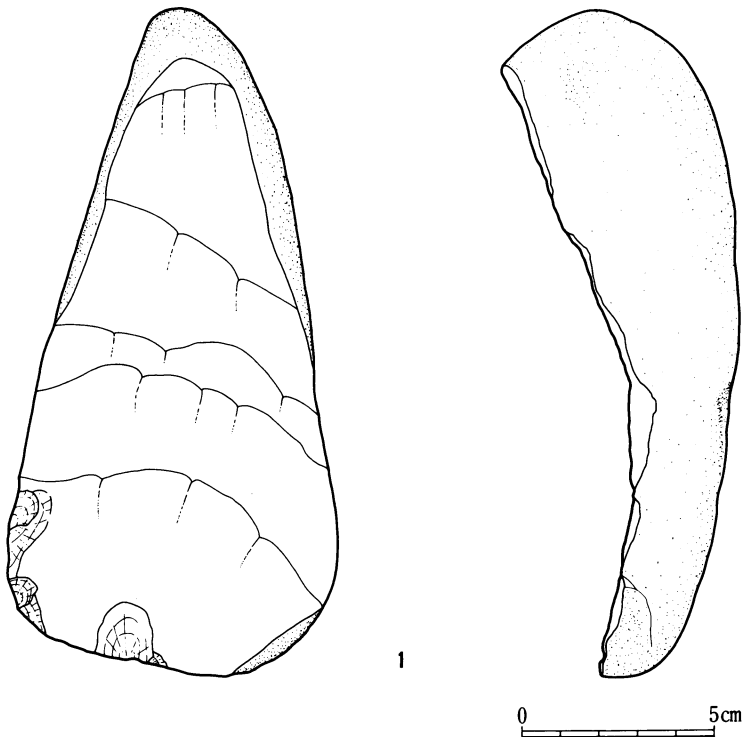
今回の調査で見つかった遺物は、旧石器時代の石器（ナイフ形石器・尖頭器・敲石・剥片・碎片）、その他として、江戸時代の銭貨（寛永通宝）・泥面子・基石・キセルなどがある。また、小破片のため図化しなかったが、奈良・平安時代の土師器・須恵器、近世から近代にかけての陶磁器類が若干見つかった。

2. 石器

第1ブロック出土の石器（第9図、第1表、図版4）

図化したのは、1の敲石1点のみである。片面の頂部から基部にかけて、大きく割れている。割れた部分の基部縁辺には、大きく割れた時点の、加撃による細かな剝離を認める。このことから本資料については、母岩ではなく敲石と判断した。なお、基部・頂部を中心に、若干の敲打痕を認める。

なお、図化しなかった遺物として、剥片が4点見つかっている。剥片のうち、変成岩2の剥片が2点、珪質頁岩1、珩質頁岩2の剥片がそれぞれ1点ずつという構成である。



第8図 第1ブロック出土遺物（1/2）

第2ブロック出土の石器（第10図、第2表、図版4）

図化したのは、ナイフ形石器2点、剥片1点である。1は、安山岩製のナイフ形石器である。尖頭部のみで、基部は欠損する。折れ面には再調整は加えられず、欠損のままである。尖頭部の両側縁に大きな剝離を加え、調整している。

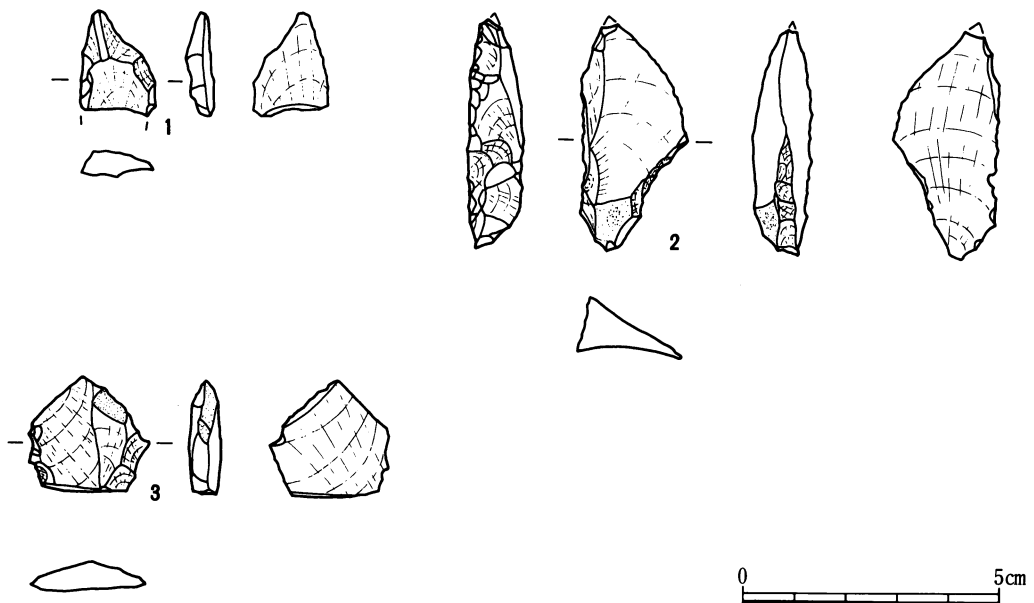
2もナイフ形石器で母岩は珪質頁岩3である。側縁の片側は、比較的大きな剝離を加えた調整を施し、その反対側の尖頭部から側縁を刃部とする。刃部側の基部付近は、反対側と比較すると細かな剝離を繰り返し、丁寧な調整で加工する。ナイフ形石器としては、典型的な形である。刃部には、使用時と考えられる刃こぼれ痕を顕著に認めた。

3は剥片で母岩は珪質頁岩1である。本ブロックでほかに見つかった剥片はきわめて小さなものが多く、3はその中では大ぶりの剥片である。

そのほかに、図化しなかったが、剥片3点、碎片12点、礫1点が見つかった。碎片は、3の剥片の母岩である珪質頁岩1が圧倒的に多い。礫は1点のみであり、他の石器より、かなり上層の地層（Ⅲ層最上部）から出土した。砂岩製で、両面で熱を受け、表面の色調が赤褐色となる。

確認トレンチ出土の石器（第11図、図版4）

第11図1は、黒曜石製の尖頭器である。確認トレンチのひとつである第3トレンチから出土した。出土層位は表土直下で、付近は、昭和46年に送信所の鉄塔を撤去した際の攪乱坑が著しい場所のひとつであり、この遺物は、その攪乱中からの出土である。おそらく、昭和46年の時



第9図 第2ブロック出土遺物（2/3）

第1表 第1ブロック出土遺物計測表

挿図番号	遺物番号	器種	石材・母岩	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	使用痕 の有無	欠損 の有無
1	A3-60-1	剝片	珪質頁岩1	49.15	21.60	22.80	20.84	+	+
	A3-60-2	敲石	変成岩1	177.00	86.40	52.40	717.41		
	A3-60-3	剝片	変成岩2	14.60	10.00	6.90	0.78		
	A3-60-4	剝片	変成岩2	16.20	9.70	4.50	0.78		
	A3-70-1	剝片	珪質頁岩2	34.40	14.40	9.10	3.96		

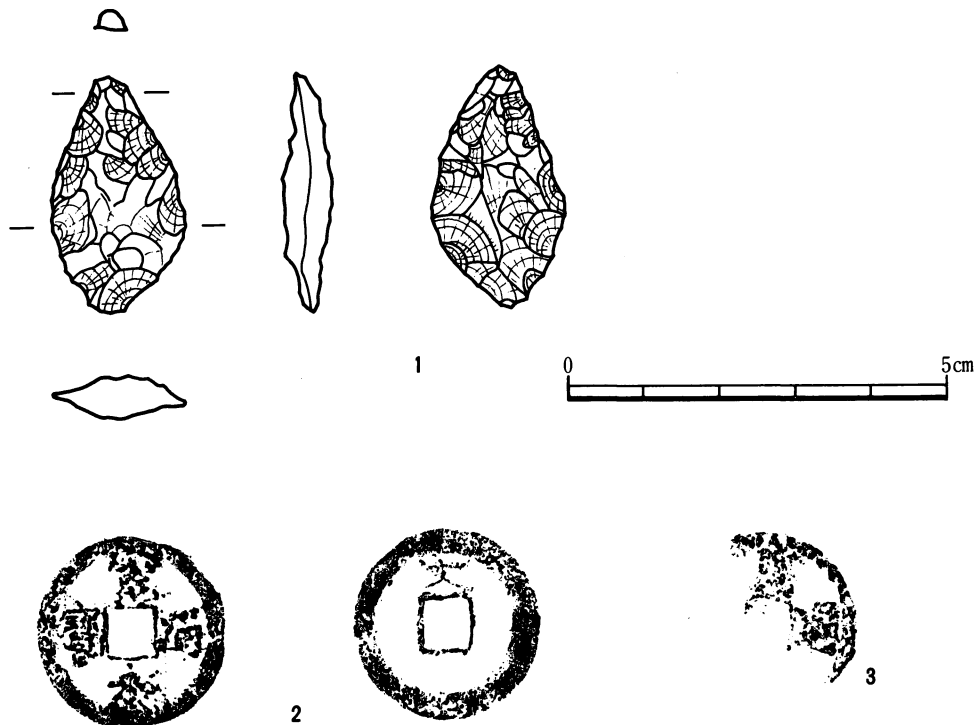
第2表 第2ブロック出土遺物計測表

挿図番号	遺物番号	器種	石材・母岩	最大長 mm	最大幅 mm	最大厚 mm	重量 g	使用痕 の有無	欠損 の有無			
3	A3-57-1	砕片	珪質頁岩1	9.00	6.70	2.00	0.08					
	A3-57-2	剝片	珪質頁岩1	23.00	21.60	6.10	3.08					
	A3-66-3	剝片	珪質頁岩2	11.90	12.70	3.20	0.63					
	A3-66-4	剝片	珪質頁岩2	10.65	23.80	6.40	1.87					
	A3-66-5	砕片	珪質頁岩2	11.00	5.25	2.00	0.09					
	A3-67-1	剝片	珪質頁岩2	13.10	15.00	3.30	0.87					
	A3-67-2	砕片	珪質頁岩1	13.05	10.70	2.40	0.29					
	A3-67-3	砕片	珪質頁岩1	5.70	4.10	1.00	0.01					
	A3-67-4	砕片	珪質頁岩1	9.00	7.80	2.00	0.13					
	A3-67-5	砕片	珪質頁岩1	15.25	9.40	4.00	0.34					
1	A3-67-6	ナイフ形石器	安山岩1	20.70	15.00	3.45	0.97		+			
	A3-68-3	砕片	珪質頁岩1	7.70	5.40	1.80	0.06					
	A3-68-4	砕片	珪質頁岩1	12.70	8.40	4.30	0.37					
	A3-68-5	砕片	珪質頁岩1	9.60	4.65	2.55	0.02					
	A3-68-6	砕片	珪質頁岩1	8.20	4.15	1.55	0.02					
	A3-68-7	砕片	珪質頁岩1	12.00	5.40	3.30	0.14					
	A3-68-8	砕片	珪質頁岩1	9.95	5.80	1.65	0.03					
	2	A3-68-9	ナイフ形石器	珪質頁岩3	43.70	21.10	11.00			6.89	+	+
		A3-78-1	礫	砂岩	35.90	27.25	15.50			24.52	披熱痕	

点で、より下層からこの位置へ移動した遺物と考えられる。本来の層位は、Ⅲ層上面と思われるが、あるいは縄文時代早期の遺物である可能性もあり得る。尖頭部の先端を、若干欠損する。両面加工で、最終調整は図のように置いた場合、表裏面とも右側縁部に最終的な調整を加える。計測値は、最大長30.45mm、最大幅17.10mm、最大厚6.25mm、重量2.45gである。

3. その他の遺物 (第11図、第3表、図版4)

第11図の拓影図で示したのは、江戸時代の銭貨である。2・3は、いずれも寛永通宝である。2は完形で、表裏面ともかなり腐食が激しい。3は、全体の3分の1ほどが遺存する。表裏面は腐食に加え、文字面の磨滅も激しく、肉眼では銭貨名を断定できないが、拓影では、寛永通宝の「寛」と「通」がかろうじて判読できた。図版4に、銭貨と同時期と考えられるキセル、泥面子、碁石を掲載した。キセルは、火皿から雁首部及び吸口部のふたつに分かれるが、セットであろう。中間の木質のつなぎ目部分は、腐食のため遺存しなかった。雁首部の内面には、脂がかなりの厚みで詰まっていた。泥面子は完形品1点で、表面の意匠は大黒様である。碁石は1点で、若干欠損する。遺存する表面には、黒色の塗りを認める。



第10図 その他の出土遺物 (1/1)

第3表 銭貨計測表 (径・厚はmm、重量はg。いずれも小数点第2位)

挿図番号	銭種	外縁外径	外縁内径	内郭外径	内郭内径	外縁厚	文字面厚	重量
10図-2	寛永通寶	22.25	20.40	6.60	6.10	1.15	0.80	2.86
10図-3	寛永通寶	-	-	-	-	1.30	0.95	-

VI まとめ

古作中台遺跡の調査地区において、今回得た成果についてまとめておきたい。

上層遺構については、今回の調査地区では鉄塔の基礎による攪乱が著しく、発見することができなかった。しかしわずかに見つかった遺物は、奈良・平安時代の土師器小破片・酸化焙焼成の須恵器小破片、江戸時代の銭貨・泥面子・碁石・キセル、近世から近代の陶磁器などがあり、その量こそわずかではあるが、周辺地域での上層の遺構の存在を予測させる基本的な資料を得たと言える。今回の調査地点で上層遺構が確認できなかったのは鉄塔跡の攪乱が著しかったためであり、周辺地域には、上層遺構が存在する可能性が十分あることを付記しておきたい。

二つ目として、旧石器時代の遺物集中地点や炭化物集中地点の発見があげられる。遺物集中地点（ブロック）については2か所を確認した。いずれも地表面からの大きな攪乱により、攪乱と攪乱の間にわずかに遺存する集中地点であり、ブロック全体を把握できる資料とは言えない。しかし、特に東葛飾地域においては早くから開発が進み、旧石器時代の調査の手が加えられないままとなっているが、今回、本遺跡の調査地点のように、地表面からの攪乱が著しい場所においても、旧石器時代の遺物集中地点をはじめとする調査成果が、断片的でも得られたことの意義は少なくないと思う。

旧石器時代の炭化物集中地点は2か所確認した。ローム層中の炭化物集中地点については、その成因について、人工的なものか否かという基本的な議論があり、結論は出ていない現状であろう。今回の調査でも、立川ローム層の第1黒色帯に相当する層であるIV層下部からV層上面を中心に、炭化物の集中を認めることができたが、炭化物の集中が、どのような現象の結果として、その痕跡を遺存しているのかを、明らかにすることはできなかった。

写真図版



旧船橋海軍送信所の記念碑



遺跡周辺の航空写真 撮影：京葉測量株式会社（昭和42年撮影）



遺跡空中写真



1. 基本土層 (B2-89グリッド)



2. 第1ブロック



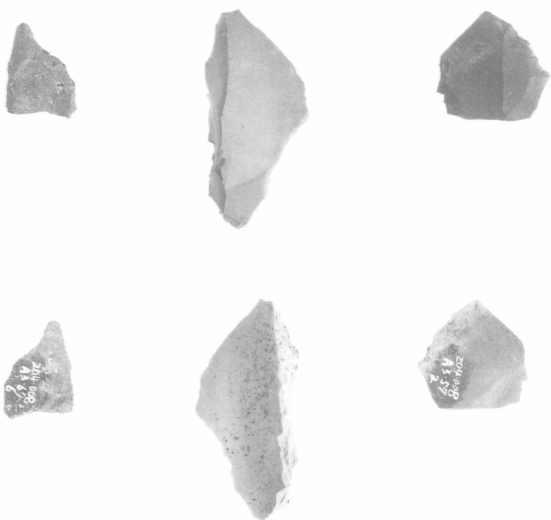
3. 第2ブロック



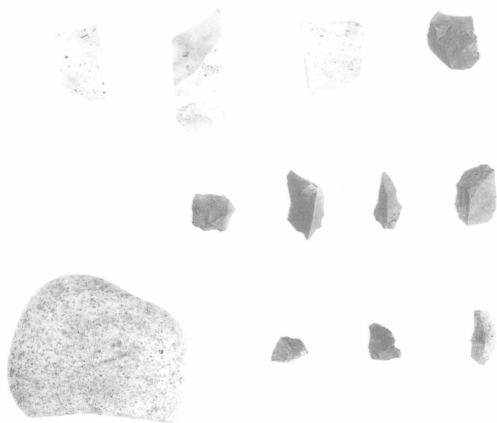
1. 第1ブロック出土石器 敲石 (1/3)



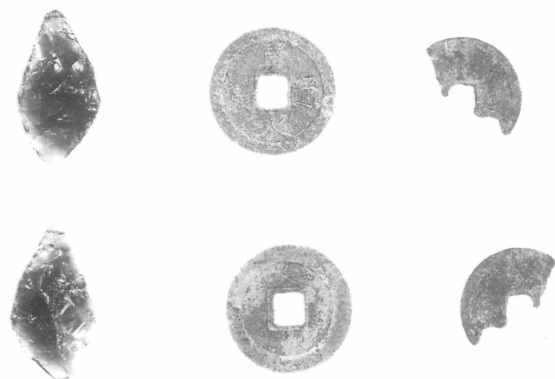
2. 第1ブロック出土石器 剝片・碎片 (2/3)



3. 第2ブロック出土石器 ナイフ形石器・剝片 (2/3)



4. 第2ブロック出土石器 剝片・碎片・礫 (2/3)



5. その他の出土遺物 尖頭器・銭貨 (2/3)



6. その他の出土遺物 キセル (1/2)

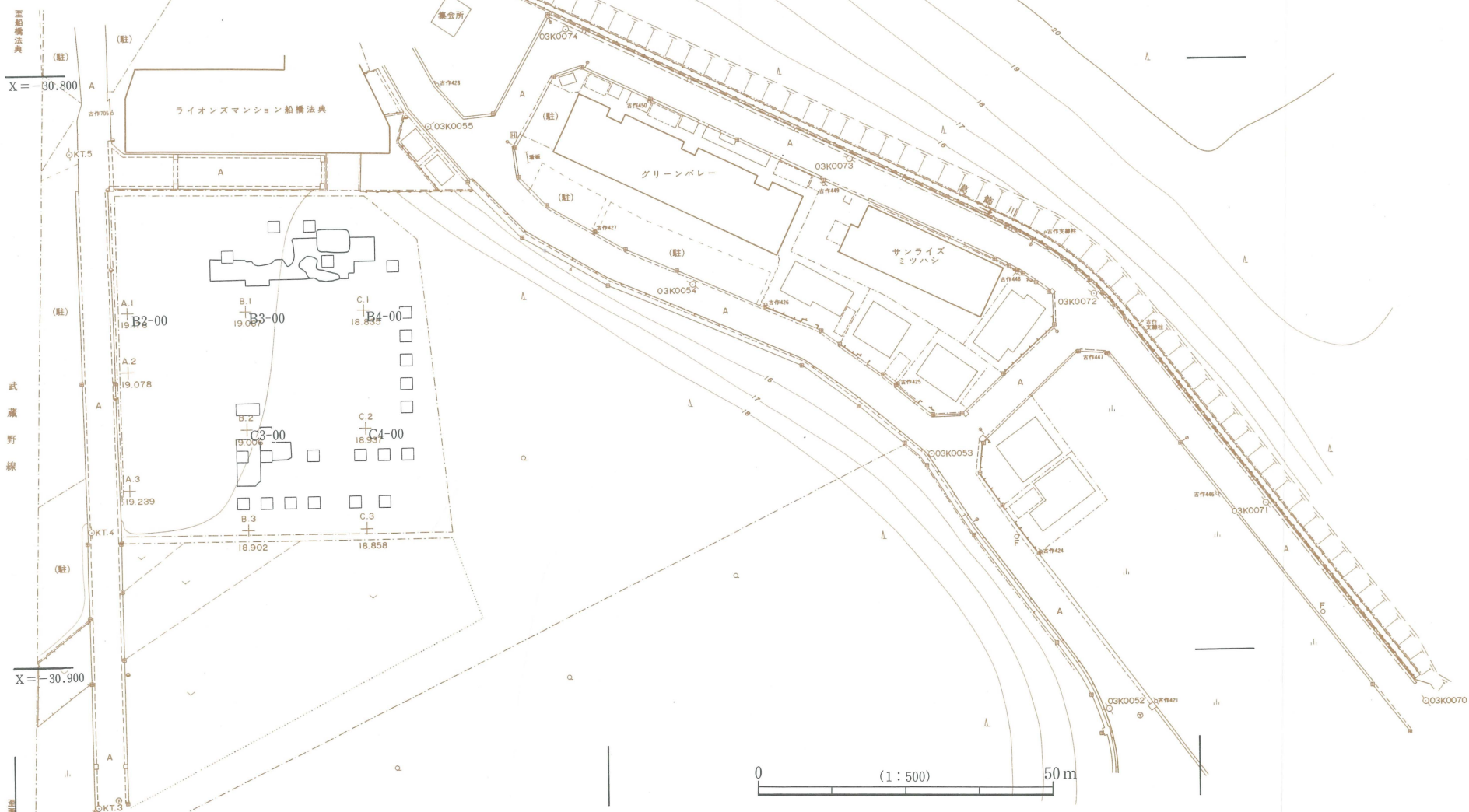


7. その他の出土遺物 泥面子・碁石 (1/1)

Y = +12.500

Y = +12.600

Y = +12.700



附図 古作中台遺跡地形測量

報告書抄録

ふりがな	ふなばしし こさくなかだ いせき
書名	船橋市古作中台遺跡
副書名	東京税関古作寮建設に伴う埋蔵文化財調査報告書
巻次	
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告
シリーズ番号	第261集
編著者名	田形孝一
編集機関	財団法人 千葉県文化財センター
所在地	〒284 千葉県四街道市鹿渡 809番地2 Tel 043-422-8811
発行年月日	西暦 1995年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
古作中台	千葉県船橋市古作1-415-2他	204	008	35度 42分 55秒	139度 58分 20秒	19930701～ 19930930	3,564m ²	東京税関古作寮建設に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
古作中台	散布地	旧石器時代	遺物集中地点 2か所 炭化物集中地点 2か所	尖頭器 ナイフ形石器 剝片 碎片 敲石	

千葉県文化財センター調査報告第261集

船橋市古作中台遺跡

—東京税関古作寮建設に伴う埋蔵文化財調査報告書—

印刷	平成7年3月30日
発行	平成7年3月31日
発行	大蔵省関東財務局 東京都千代田区九段南1-1-15 Tel 03-3238-1011
編集	財団法人 千葉県文化財センター 四街道市鹿渡809-2 Tel 043-422-8811
印刷	株式会社 弘文社 市川市市川南2-7-2 Tel 0473-24-5977
